

17歳の風景 少年は何を見たのか

2005(平成17)年6月10日鑑賞〈東映試写室〉



監督＝若松孝二／出演＝柄本佑／針生一郎／関えつ子（シマフィルム配給／2005年日本映画／90分）

……予想どおりの難解な映画。「あんたはいつも遠くから見ているだけだ」と富士山を仰ぎ見ながら呟いた少年は、ただひたすら自転車をこいで北に向かうのみ。少年のセリフはほとんどないが、時々見せる惨劇シーンを観れば、曰く因縁があることがわかる……？ 本州の北の端に到達するまでに少年が会おうのは軍隊体験を語る老人と、モノ悲しい故郷の歌を歌う強制連行された在日朝鮮人の老婆のみ。1960年代以降、数々の問題提起をしてきたアウトサイダー監督、若松孝二監督の今回の問題意識は、さて……？

第4章

岡山のバット殺人事件がヒント……？

2000年に岡山県で17歳の少年が母親をバットで殴り殺したという事件が起きたらしい。弁護士のクセに……と言われるかもしれないが、残念ながら私はこの事件を知らなかった。このような凶悪犯罪は、この事件のみならず全国的に見ればたくさん発生しているが、この17歳の少年はその後自転車で逃走し、16日後に何と東北地方の秋田で逮捕されたとのこと。自転車による走行距離は16日間で1300キロだから、1日に100キロ近く走ったことになるが、それは相当なエネルギーを要する作業。

刑事事件としての処理はすでについていると思うのだが、なぜこの少年は自転車に乗って北へ……？ そう考えた若松孝二監督は、この少年と一緒に旅を試みたいと考え、それを映画にすることを思いついたとのこと。やはり、天下のアウトサイダー（？）若松監督の発想は変わったものすごい……！

富士山はホントに象徴的！

映画の冒頭、主人公の少年は富士山を見ながら、「あんたはいつも遠くから見ているだけだ……」と呟いた。岡山に住んでいた少年にとっては多分はじめて見る富士山だったと思うが、もちろんいくら富士山を見ても、富士山から少年に対して語りかけてくるものなどあるはずがない。もしそれがあるとしたら、それはすべて自分の気持の反映であるはずだが、この17歳の少年には自分から富士山に語りかけようとする気持もなければ語りかける具体的な内容もその表現力も持ち合わせていないはず……。

したがって富士山が少年に対して何も語りかけず、遠くから少年をじっと見ているだけであるのは当然……。こんな泰然とした富士山と、自分が何のために北に向かっているのかもわからないまま、ひたすら自転車をこぐ少年を対比させるのはちょっと酷……？

少年の逃走劇と戦後60年をムリヤリ結合……？

この映画では、ひたすら北に向かって自転車をこいでいく少年がその途中、なぜか2人の老人と出会い、この老人が少年に対して、なぜか「あの戦争」を語ることに……。しかし現実の事件における少年の逃走劇においては、多分こんな事実は存在しなかったはず。したがってこれは若松監督の創作（でっちあげ！）だと私は思うのだが……。

もちろん私は、その創作（でっちあげ）が悪いといっているのではない。若松監督は、この少年と一緒に逃走の旅を続けていけば、きっとこんな老人と出会い、老人の話聞くことになるだろうとイメージしたのかもしれないし、あるいは戦後60年の今、この少年は「あの戦争」のことなど何も知らず興味ももっていないはずだから、せめて逃走の旅においてそれを聞かせてやろうと考えたのかもしれない。

もちろんこれは勝手な私の想像だが、多分真相は後者だろう。17歳の少年の逃走劇に何の関連性もない2人の老人を登場させて「あの戦争」と結合させる発想はいかにも若松流……？

戦争との出会い その1

17歳の少年の「戦争との出会い」の第1は、17歳の時に軍隊にいたと語る老人。彼が語る戦争体験は、「自分が17歳の時は国のために死ぬことしか考えていなかった」というもので、ごく標準的(?)なもの……。 「軍国少年」という言葉は今では死語となっているが、あの当時の17歳の男の子は9割以上が「軍国少年」だったはず。したがって「国のために死ぬことしか考えていない」17歳の少年が、今どきの17歳の少年のように、母親殺しなどの凶悪犯罪を犯すことなどありえなかった……？

それにつけても、「金正日將軍万歳！」と叫んで絶対服従を誓っている(?)北朝鮮の実情を垣間見ていると、「あの当時」の「天皇陛下万歳！」と叫んでいた軍国主義国ニッポンの姿と実にピッタリ……？ イスラムの自爆テロは複雑な宗教問題が絡むため、日本人にはかなり理解が困難だが、現在の北朝鮮の姿を見ていると、それを批判するだけではなく、あの当時の軍国主義国ニッポンと対比して考える必要があることは明らかなのだが……。

戦争との出会い その2

第2の出会い、降り積もった雪の中で足をくじいて歩けなくなっている老婆。老婆から声をかけられ、「どうしたの？」と尋ねた少年は、事情を聞くと自転車を放置したまま老婆を背中に背負い、雪の中を歩いて老婆の家まで運んで行った。母親殺しの少年だって何もいつも凶悪なわけではなく、ごく普通の少年としての自然な気持も持ちあわせているもの……？

1人住まいらしいこの老婆が少年にご飯をふるまい、聴かせるのは、故郷朝鮮の歌。少女の頃に、強制連行されてきた在日朝鮮人であることはこの老婆の語りでわかるのだが、残念なのは老婆が歌うモノ悲しい故郷の歌の意味が理解できないこと。日本語まじりだから、その部分はわかるものの、ほとんどを占めるハンゲルの歌詞は私にわかるはずがない。

若松監督には、この歌の意味が観客にわかるよう、せめて日本語の歌詞ぐらいは字幕表示してほしいと思うのだが……。

ラストも難解！

何日も続く逃避行(?)の中、疲れはてた少年は1度自転車からころげ落ちることに……。そのため、主を離れて1人(?)走っていった自転車はガードレールにぶつかって倒れ、その結果チェーンが切れてしまった。それがわかった少年は、どうするのかナ?とと思って観ていると、何と自転車を右肩にかついで、再び歩き始めた。そしてそのシーンがラストに向かって延々と続いていく……。その途中で、また前輪が脱輪したり……。

一体少年は何のために、既に乗れなくなったこの自転車をかついで歩いていくのか? 少年は息を切らせながらも道路を歩き、階段を歩き、そして小高い山に登り、遂に本州最北端まで……。海の向こうに見えるのは北海道……? そんな中、少年は遂に自転車を崖の上から真下に見える海の中へ荷物ともども放り投げた……。そして少年は大声でわめいたが、その声は一体何を伝えたかったのだろうか……?

不親切なバック音楽も若松流……?

ここでも残念なのは、ラストに向かって歩いていく少年の心の中の声を代弁するかのような音楽(?)がバックに流れてくるのだが、その言葉がほとんど聞き取れないこと。唯一、この映画のテーマ(?)となっている「ゼツ、ゼツ、ボウボウ、絶、望、ボウ」という言葉は聞き取れるのだが、それ以外はほとんど何を言っているのかわからない……。これはちょっと不親切というもの。もともと、これが若松流なのかもしれないが……?

2005(平成17)年6月11日記